

# 留学生寮から真の国際学生宿舎へ：学生寮混在化のケーススタディ

一橋大学国際教育センター准教授 阿部 仁

ABE Jin

## 1. はじめに

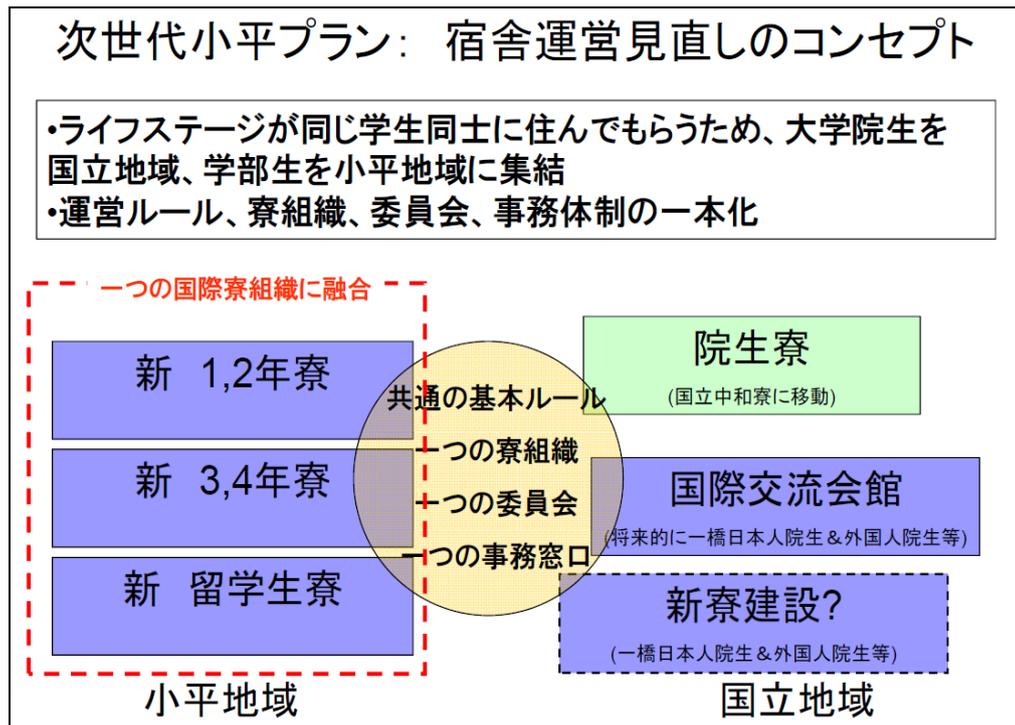
一橋大学の小平国際キャンパスには785居室を擁する小平国際学生宿舎がある。ここには一橋大学の日本人学生と留学生、東京学芸大学留学生、電気通信大学留学生、東京農工大学留学生が入居し、寮生のために「良好な居住及び勉学環境を提供するとともに、国際意識の高揚に資する」ための施設として、生活を通じて学生のグローバル化を促進する場として2002年に建設された（一橋大学 2004）。

設立当初、大学は従来の日本人1、2年生寮、日本人3、4年生寮、日本人院生寮といった学寮組織を小平国際学生宿舎にそのまま当て込み、加えて上記4大学（一橋大学、東京学芸大学、電気通信大学、東京農工大学）の留学生が属する留学生寮を新たに寮組織として追加することで寮生の国際交流を図った（太田 2007）。しかしながら寮生交流は活発化せず、むしろ日本人寮と留学生寮組織毎に隔離され、お互いの関係が疎遠になった。当時の留学生寮に所属していた寮生は、「国際学生宿舎において国際交流とは留学生寮組織だけが担わされるタスクになった」との感想を報告書に残している（武田 2008）。2002年から2008年の間、少なくとも2回にわたって「国際」という看板を留学生寮だけが担う構図を解体する試みがあったがいずれも失敗に終わった。おのおのの寮生が所属する組織の絆や、それを前提として作られた事務組織の堅固さは、国境や言語の壁よりはるかに高いものであることをこの数年のこう着状態が物語っている。この状況を打破し、国際学生宿舎で日本人学生と外国人留学生同士の国際交流を促進するため、2011年度より日本人と留学生の混住型学生寮の整備やこれを支援する事務体制の充実が大学運営の基本方針である「一橋大学プラン 135」に明記された（一橋大学 2011）。

## 2. 混住寮移行までの経緯

学生寮統合・混住化の具体策である「次世代小平プラン」（一橋大学 2010）には、①2011年4月から4年間をかけて学部生を小平地区に集結させるため、国立地区に拠点を置く日本人3、4年生寮と小平地区に拠点を置く日本人院生寮を物理的にトレードし、②同時に小平地区では学生寮組織の解体を進め、学生の国籍で分けられている寮から「ライフ・ステージが似ている日本人、留学生寮生同士が同じ建物やフロアに住む」混住寮へと転換し③これに沿った形で事務体制を再構築する、の3項目が含まれた（図1）。

図 1. 次世代小平プランの概念図



発達心理学におけるライフ・ステージとは、ある一定の特徴を持った期間や段階（e.g., 青年期、成人期など）を指すと同時に、その時期における人の生き方や生活の仕様と定義される（庄司 2006）。またキャリア理論では、人はそれぞれのライフ・ステージにおいて共通の関心や課題を持ち、それらの課題に取り組むことを通じて人間としての成長を遂げていくと解釈されている（Super 1980）。新入学学部生から博士課程までの寮生をライフ・ステージ的にグループ化すると、入学したばかりの学部生には引越先先の生活空間において新たな仲間との交流を求める傾向が強い。一方で就職活動を間近に控えた学生はキャリア志向、進路志向が強くなり、大学院生は研究センターの生活を送るためマイ・ペース、マイ・スペースを重視する傾向にある。「次世代小平プラン」は、国籍ではなくライフ・ステージというくくりで寮生を同じ建物や地域に集結させ、寮生交流の促進をはかる。

「次世代小平プラン」の承認を受け、小平国際学生宿舎では 2011 年 4 月から日本人 1、2 年生寮と留学生寮が統合し、国際寮化への第一歩を踏み出すことになった。従来の 4 大学からの留学生に加え、新たに日本人 1、2 年生の受け入れを開始したことで、2010 年度は 14 名であった 4 大学の学生寮スタッフ（レジデント・アシスタント：RA）を 2011 年 4 月には 19 名（内、一橋大学 10 名）体制に増強し、国際教育センターおよび国際課の教職員 2 名が国際寮アドバイザーとして現場指導に当たることとなった。

### 3. 移行初期の課題

従来、日本人 1、2 年生寮の男子は 6 人部屋の共有ユニットに入居し、日本人 1、2 年生寮の女子は 3 階と 4 階の日本人女子専用個室フロアに入居していた。よって、構造的に日本人 1、2 年生は緊密な人間関係を作れる反面、同じ建物に住む留学生と

の交流から疎外された環境にあったといえる。男子が住む共有ユニットでは、毎年4月の新入生歓迎時期に2年生と1年生による交流食事が夜遅くまで開催され、伝統と称して深夜に外に出て突然奇声を発しながらフロアを駆け回るなどのイニシエーション（儀式）が行われており、留学生寮側の批判を招いていた。

一方、留学生は主に個室フロアに居住し、男子の比率が多いものの原則は男女混合フロアであった。留学生寮生の過半数はアジア（中国、韓国）からの大学院生を含む正規学部生であるが、一方で欧米からの短期（1年未満）交換留学生も100名ほど居住しており、属性（国籍、年代、性別等）に関わらずランダムに混住していた。このような男女混住環境が当たり前と思い、日本人1、2年生寮の女子フロアの存在を知らずに足を踏み入れた男子留学生に対し、女子寮生が「不審者」として留学生を守衛室に通報し、留学生寮が対応に立たされたことも幾度とある。このように日本人1、2年生寮と留学生寮が対話するのは主にトラブルが発生したときであり、日常生活における人的交流は少なかった。

「次世代小平プラン」が大学から提示された際、留学生寮執行部はこの提案を前向きに捉えたが、混住の実現性については日本人1、2年生寮の協力が得られないであろうと懐疑的な態度を示した。逆に日本人学生1、2年生寮執行部は日本人寮生同士の円滑な関係が崩されることを恐れた。双方の寮執行部と学生寮担当者が3カ月にわたり数回の協議を重ねた結果、2011年4月から入寮する日本人学生と留学生新入生が同じフロアに入居し、「留学生」、「日本人学生」の区別なく「寮生」として扱うことで合意した。新しい国際寮の運営は大学の管理下で日本人寮と留学生寮の執行部が共同で運営することになり、入居中寮生への事前説明会を実施した。

国際寮立ち上げの準備は整ったかのように見えたが、新入生の入居と同時に問題が浮上した。日本人2年生が新入生歓迎の交流食事を独自開催し、そこには新入日本人寮生しか参加しておらず、日本人1、2年生寮執行部による日本人新入生の囲い込みが始まっていると留学生寮が大学に訴えたのだ。これを受け、4月上旬に学生寮担当者の仲裁により双方の寮執行部による緊急会議が持たれ、寮内イベントは大学の事前承認を受けたものだけに限り、留学生と日本人学生にオープンな形で開催する方針を再確認した。しかしながら、この後も日本人2年生メンバーの多くは大学に隠れた形で日本人新入生を中心とした交流食事を実施し続けた。一方の留学生寮は日本人学生と留学生新入生の双方に開かれたパーティーを開催し、双方の執行部が競うようにイベントを実施した結果、「分断」と「交流」のメッセージが入り乱れた新歓期となった。

このような環境の中、1)日本人1、2年生寮執行部が独自開催した交流食事は、国際寮の寮生交流に貢献できたか？2)国際寮に入居した新入生は寮生交流をどう評価したか？3)日本人1、2年生寮執行部が大学の許可を得ずに交流食事を実施した理由は何か？居住者アンケート調査や日本人1、2年生寮執行部から行ったヒアリングをもとにこれら3点について考察する。

## 4. 調査結果

### 4. 1 交流食会の貢献度調査結果

2011年4月に発足した国際寮に入居した新入寮生97名（日本人学生63名、外国人正規留学生34名）を対象に、自分の住んでいる居住区（6人部屋の共有ユニットやフ

ロア)で開催された食事会が交友関係の構築にどの程度貢献したかについてアンケート調査した。アンケートは入寮から1カ月が過ぎた5月中旬から下旬にかけて実施し、回答者数は38名(日本人学生22名、外国人正規留学生16名)、回答率は39%であった。アンケートはWeb入力による匿名回答方式で、日本人学生には日本語による質問票を、外国人留学生には日英併記の質問票を送付した。

日本人2年生が独自開催した新入生歓迎の交流食事会は13の居住区の総当たり制で行われ、新入寮生は原則自由参加であったものの、4月に入ってほぼ毎晩のように開催された。アンケートに回答した22名の日本人学生のうち20名(91%)が、交流食事会は交友関係の構築に「役だった」または「大いに役だった」と評価している。一方、アンケートに回答した留学生は、16名中7名(43%)が「役だった」または「大いに役だった」と評価し、過半数は不参加またはどちらともいえない(57%)と回答した(表1)。

表1. 交流食事会が交友関係構築に貢献した割合

回答	日本人学生	外国人留学生
全く役に立たなかった	0	0
役に立たなかった	0	0
どちらともいえない	0	5
役だった	1	7
大いに役立った	19	0
不参加のため不明	2	4
合計	22	16

表2は、交流食事会における留学生の参加割合について日本人学生に尋ねた結果である。「わからない」という回答を除き、留学生の参加が全くなかったという回答が77.8%を占めた。交流食事会は自由参加といいつつ、参加者のほとんどが日本人新入生であった実態が浮き彫りとなった。

表2. 日本人学生から見た、交流食事会における留学生の参加状況

回答	「わからない」を除く	
	回答数	割合
全くない	144	77.8%
ほとんどない	8	4.3%
ないとはいえない	27	14.6%
参加していた	6	3.2%
多々参加していた	0	0%
合計	185	

#### 4. 2 国際寮の生活空間内での国際交流度調査結果

上記アンケートと同時に、国際寮の生活空間における日本人寮生と留学生寮生の交流がどの程度活発なのか、その状況を作った要因についても調査した。同じ生活空間に住む寮生同士の交流が「ある」、「活発である」と評価したのは回答者の約半分であった。アンケートに回答した22名の日本人学生のうち、12名は混住環境における日本人学生と留学生間の国際交流が「ある」または「活発である」と評価している。留学生16名のうち半数は、混住環境における日本人学生と留学生間の生活交流が「ある」または「活発である」と回答している（表1）。よって、住民交流度に関する設問について日本人学生と留学生の回答に大きな差はなかった。

寮生交流が「ある」または「活発である」と回答した寮生は、その状況を作った要因として「共有の留学生は歳も近く、日本語でコミュニケーションがとれるので、一緒にルールをつくったり、雑談したり、お土産をあげあったりと、日本人の友人と変わらず仲良くしています」、「ルームメイトが全員良いメンバーだった」、「互いに積極的にコミュニケーションをとって、理解を深めようとし、留学生の日本語が上手だったから」、「日本人学生も留学生も積極的に話しかけあったこと」など寮生同士の積極性によるものが多かった。反対に、交流が「多少ある」、「ない」あるいは「まったくない」と感じた寮生からは「留学生同士でかたまる」、「互いに会話しようとしにくいこと」、「自分の人見知りさ」、「寮執行部の段取りの悪さ」など、自分や相手方の消極的な姿勢が要因として挙げられた。

表3. 「国際寮」に入寮した新寮生から見た国際交流度

	日本人 学生	外国人 留学生
分離状態	1	0
ない	2	1
多少ある	7	7
ある	4	7
活発である	8	1
合計	22	16

#### 4. 3 日本人学生寮執行部の行為に関する調査結果

日本人1、2年生寮執行部の13名に対し、1) 交流食事を独断で実施した理由と2) 留学生の交流食事会への勧誘が消極的だった要因について個人面談形式でヒアリングした。ヒアリングは入寮から1カ月が過ぎた5月中旬から下旬に実施し、これらの面接結果から日本人寮執行部が混住や国際化に抵抗した理由を分類し整理した。

1) については、留学生寮と日本人1、2年生寮の混住化を大学が管理することを受け、自分たちは今後新1年生の指導に関与できないとの見方が寮執行部に広がったのが発端だった。そのため、大学に相談せずに交流食事会の実施を決断し、新1年生の入寮と同時に交流食事会を開催した。交流食事会の開催については、「居住区内の上下の関係と楽しい寮の伝統を守りたいという思いが強かった」、「日本人2年生と日本

人1年生が仲良くなれる機会を提供することのどこが悪いのか」との思いを打ち明ける日本人寮執行部が多くいた。中には、大学側が推進する混住を「正直したくなかった」、「大学の決定に納得がいかなかったために交流食事会を行った」など、混住化に否定的なスタンスを見せる日本人1、2年生寮執行部メンバーもいた。

2) について、先のアンケート調査に基づき留学生の参加率が少なかった件について尋ねると、留学生を積極的に食事会に勧誘したのは一部の女子フロアのみであることが分かった。他の執行部メンバーからは、従来「日本人1年生は全員参加」で行われていた交流食事会を「自由参加」と表現を変えたものの、留学生を「誘ったが来なかった」「誘うにも連絡先がわからない」「年齢が上なので声をかけにくい」、「留学生はノリが違うためあえて食事会に積極的には誘わなかった」など、留学生の勧誘に対して消極的な姿勢が目立った。

## 5. 考察と今後の課題

本稿では、従来別々に運営されていた日本人1、2年生寮と留学生寮が統合された直後の寮生交流食事会の貢献度、混住環境となった居住区での寮生交流の進展度、および学生寮再編成の初期期階で起こった日本人寮執行部の消極的な姿勢とその要因について調査した。本事例は既存の寮組織の統合による混住化を扱ったケースであり、混住寮を新築する場合に適用できない要素が多いものの、学生寮混住化は寮生交流にプラスにもマイナスにも作用し得る諸刃の剣であることを示している。

例えば、日本人2年生が独自開催した交流食事会においては、従来日本人1、2年生寮のみが対象であった伝統行事を焼き直し表面的には留学生にも展開しようとしたものの、国際交流に積極的でない日本人寮執行部の運営が留学生寮執行部に不信不満を抱かせ、寮組織間の確執が広がった。参加した日本人寮生にとっては評価の高い支援プログラムだったが、参加した少数の留学生には交友関係の構築にあまり役立っていないイベントと評された。同様に、同じ生活空間に住む寮生同士の交流が「ある」、「活発である」と評価したのは回答者の約半分であった。言い換えれば、残りの半分は交流が「多少ある」またはそれ以下の評価を下していることになる。

日本人学生と留学生の混住環境をよりプラス方向に導くためには、意図的に手入れることが重要である。まず入寮募集段階では日本人学生や留学生といったアイデンティティを極力意識させず、最初から「一つの国際寮に入寮する寮生」といったイメージを定着させるための広報資料が望ましい。続いて入居計画段階では、事前アンケートに基づき、寮生交流に関心を持つ同年代の日本人学生と留学生の部屋割りが重要となる。今回のケースでは、組織再編決定から国際寮発足までの準備期間が3カ月と短かったためこれらを徹底できず、日本人1、2年生寮と留学生寮が個別に存在しているイメージを新入寮生に露呈してしまった。

入寮後に行う新入寮生歓迎イベントも運営次第では交流を促進させる契機であったが、今回のケースでは混住化および寮組織の統合に反対する日本人2年生メンバーが日本人新入生に偏重した食事会を主導し、分裂した寮組織をさらに印象付けた。企画初期段階から双方の執行部が学生寮混住化の意義を共有しイベントの共同運営を行うのが理想だが、組織統合においてこのような抵抗が発生することは計画段階からもっと想定すべきであった。

また、日常の生活空間を混住から交流へと発展させるためには、ともすれば交流に消極的になりがちな寮生の後押しをする、日本人寮生と留学生寮生の架け橋となれる学生スタッフを居住区ごとにきめ細かく配置していくことが今後の課題となる。このような試みは米国大学の学生寮で行われており、学生スタッフが架け橋として実力を発揮するためには、事前にリーダーシップや異文化理解スキルを習得することの必要性が指摘されている(Geelhoed 2003)。これらの反省を踏まえ、入寮募集時から入寮後のサポートまで一貫して「混住して当たり前」という印象を来年度以降の新入寮生に定着させることができれば、日本人学生と留学生寮生の生活交流が日常の出来事として受け入れられ、国境が阻害要因とならない寮生交流が生まれやすくなるであろう。

### 参考文献

- 太田浩 (2007) 「留学生会館から国際学生宿舎へ：理想と現実、そして共生への課題」『多文化交流フォーラム』, 2: pp. 48-87, 京都大学国際交流センター.
- 庄司順一 (2006) 「ライフステージと心の発達」『母子保健情報』, 54: pp. 19-23.
- 武田歩 (2008) 「ISDAK は解体を使命とする組織である」『2007年度小平国際学生宿舎留学生寮 (ISDAK) RA 活動成果報告書』, pp. 117.
- 一橋大学 (2004) 「一橋大学 国際学生宿舎規則」  
< [http://182.48.11.188/webs/www/d1w\\_reiki/41690210013700000000/41690210013700000000/41690210013700000000.html](http://182.48.11.188/webs/www/d1w_reiki/41690210013700000000/41690210013700000000/41690210013700000000.html) > (参照 2012-08-21)
- 一橋大学 (2010) 「次世代小平プラン：留学生寮から国際的な学生寮へ」.  
< <http://www.isdak.org/img/4f867efe13080.pdf> > (参照 2012-08-21).
- 一橋大学 (2011) 「一橋大学プラン 135 — 「スマートで強靱なグローバル橋」の確立を目指して —」.  
< <http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2011/0401.html> > (参照 2012-08-21).
- Geelhoed, R. J., Abe, J., & Talbot, D. M. (2003). A qualitative investigation of U.S. students' experiences in an international peer program. *Journal of College Student Development*, 44, 5-17.
- Super, D. E. (1980). A life-space, life-span approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16, 282-298.